

## 「CELレポート（エネルギー・環境関連）」の創刊にあたって

「CELレポート」創刊号をお届けいたします。CELレポートは、所員自身の手によるエネルギー・環境関連の調査研究を取りまとめ、社内のご参考に供するものです。

CELの研究スタイルは、これまでC(culture)ならびにL(life)の分野を中心に、各所員が独自の方法で研究し、その成果を広く世に問うというものでありました。そうしたやり方に対して、昨年からは、組織としてE(energy, environment)の分野に本格的に取り組み、社内にも積極的に発信していくことを申し合わせ、準備を進めてまいりました。

しかし、Eに関しては申すまでもなく、大阪ガス全体が専門家集団であります。そのような中で、CELが敢えてこの分野に挑戦し、かつ社内に発信しようとするに至った理由は次の通りです。

第一は、これも言うまでもないことですが、エネルギー・環境問題は、大阪ガスにとってはもちろんのこと、社会にとっての重要課題であるからです。第二に、CELが社内各部署とは少し違った視点からエネルギー・環境問題に取り組むことができれば、そこに相乗効果が生まれるのではないかと考えたからです。そして第三は、広く世に問う前に、私たちCEL所員がしっかり自分の足腰を鍛える必要があるからです。まず専門家集団である社内の厳しい目によって鍛えられ、それに耐えうる力をつけた暁には、成果を広く世に問うて参りたいと思います。

こうした目的のもとに、本プロジェクトには安達、前市岡、宮本、植野、豊田、平山の6名が参加いたしました。この中には、エネルギーや経済の専門家がいる一方、こうした分野には初挑戦のメンバーもあり、出発点はまちまちです。そこで、当面の大テーマを「トリレンマの克服」あるいは「3Eの調和」(内容はいずれも同じで「経済発展」「エネルギーの安定供給」「地球環境の保全」の同時達成)と設定した上で、個別のテーマ選定やアプローチ方法の選択などについては、その枠内で各人の責任において進めることになりました。各論考における主張や考え方などについても同様であり、必ずしもCEL全体として調整されたものではありません。もちろん、こうした問題についてメンバー間で議論を重ねておりますが、CEL全体としての手法の確立や統一見解の構築までには、いま暫くの時間が必要かと思えます。しかし結果的に、創刊号で取り上げた個別のテーマは、エネルギーの上流分野に始まって地球環境問題の総論、そして各論というように、比較的バランスのとれた内容になったのではないかと自負しております。

なお、本レポートの構成は本編とトピックス編の2部構成になっております。一定のまとまりを持つ研究結果については本編に、一方、ニュース性のある情報やデータ類、あるいは分析が加えられる前の断片的な事実などはトピックス編に掲載することといたしました。

CELとして、社内にこのようにまとまった形で発信するのは、今回がおそらく始めてであり、そのため暫くは手探り状態が続くと思われれます。今後、4半期毎に本レポートをお届けすることを目標に取り組んでまいります。テーマ設定や取り組み方法、あるいは内容、形式などについて、どんなことでもご意見をいただけましたら幸いです。

1999年 4月

エネルギー・文化研究所副所長 安達 純